

Program note ＊ プログラム・ノート

❖ ロッシーニ セビリアの理髪師 序曲

オペラ『セビリアの理髪師』のあらすじをひとくちに言うと、医者の姪に恋をした伯爵が、理髪師フィガロの助けを借りて、悪者の医者を目をかいぐりながら、彼女に想いを伝え、恋を成就させるコミカルなラブストーリーというもの。

両親をなくしたロジーナは、伯父である後見人バルトロの家で監禁状態になっており、このバルトロは、娘ほど歳の離れたロジーナとの結婚を遺産目的で狙っています。ふとしたことでロジーナに恋をしたアルマヴィーヴァ伯爵は、「町の何でも屋」フィガロを使い、恋の成就のために、あの手この手の作戦を練ります。こっそり恋文を渡したり、ロジーナの音楽教師の弟子に化け、レッスンのふりをしながら駆け落ちの相談をしたりする様子は、オーボエの旋律に重ねられています。その後のホルンの旋律はアルマヴィーヴァ伯爵の狙いに気づき、負けずに応戦しているようなバルトロを想像させます。物語の結果は、アルマヴィーヴァ伯爵が、貴族の威厳を見せてロジーナを勝ち取り、バルトロにロジーナの遺産をやるというハッピーエンドで、楽しいオペラの序曲にふさわしく、落ち着いた中にも軽やかさのある旋律で、迫力ある盛り上がりの中で幕を閉じます。

このストーリーで結婚した、アルマヴィーヴァ伯爵とロジーナの後日談が、モーツアルト作曲「フィガロの結婚」となっています。

❖ ドリーブ シルヴィア組曲

I 前奏曲～狩りの女神

荘重な行進曲ではじまり、ホルンが静かなメロディを奏でます。この神秘的な雰囲気は神聖な夜の森を表現しており、ティンパニの合図とともに狩りの音楽となります。狩りの指揮となる角笛をイメージさせるホルンの勇壮なテーマが印象的な曲です。狩りの女神は角笛を合図に従者達と共に狩りの舞を披露し第一組曲は盛大に幕を閉じます。

II 間奏曲～穏やかなワルツ

ホルンの序奏のあと、モデラートの可愛らしいテーマがヴァイオリンによって演奏されます。この間奏曲は狩りで疲れた従者たちが休憩をとる場面を表現しており、狩りの時とは対照的な狩りの女神“シルヴィア”の優雅で妖艶に舞う美しい姿が描かれています。

III ピッツィカート

全曲中おそらくもっとも有名な曲で、弦楽器によるピチカー

ト奏法が用いられている。この曲では1～2曲目のような女神としての美しさではなく、羊飼いのアマンタと恋に落ちたシルヴィアの可愛らしい心が描かれている。

Ⅳ バッカスの行列

羊飼いのアマンタはシルヴィアを追い、収穫を祝う「バッカス祭」が行われているディアナ神殿の近くに辿り着きます。トランペットのファンファーレと共に町の踊り子、王子、そして家畜の羊に至るまで、皆がパレードに参加し、酒の神“バッカス”を称える場面を描いており、踊り子のような充実した打楽器のもと前奏曲のテーマに戻り曲は盛大に終わります。

◆ チャイコフスキー交響曲 第6番「悲愴」

第1楽章 Adagio (ゆっくり) ～Allegro non troppo (快速に、速すぎず)

コントラバスの弱音による虚ろな和音の上にファゴットが低くうめくような主題を演奏します。

テンポはやや速まり、ヴィオラとチェロによるテーマが不安定に演奏され、苦悩や不安な気分が募って行くかのよう激しさを加えてオーケストラ全体で展開していきます。

主部のテーマは弦楽器によるため息のような下降音型で始まります。これまでの暗い気分と変わり、甘く美しい旋律で、その美しさの中に哀切さがにじんでいます。昔を懐かしく思い出すようなフルートの明るい旋律が一瞬現れ、木管楽器群が夢を見るように上向するメロディを演奏します。弦楽器を経て第2主題が戻りさらに大きく盛り上がった後、クラリネットとの孤独なソロが消えると、間髪を入れずに激しい展開部へと突入します。オーケストラ全体で冒頭のテーマが回帰し、強奏のままクライマックスを迎えますが、今度は少しずつ冷静さを取り戻してきます。そして、穏やかな気分にはれた終結部に入り、全てを悟りきったような管楽器のコラールが安定感のある低弦の刻みに乗って静かに終わります。

第2楽章 Allegro con grazia (快速に、優雅に)

チャイコフスキーはワルツの名曲を沢山書いており、「悲愴」の第2楽章は「5拍子のワルツ」という独創的なものになっています。この2+3の5拍子という複合拍子はロシア特有の複合拍子です。

最初にチェロで出てくる旋律は音階を昇るように軽快に流れて行きます。第1楽章が重い楽章でしたので、ホッと一息つけるのですが、どこか不安定で儚さを持っており、この主題はいろいろな楽器で繰り返されます。中間部では短調に転じ、ティンパニの刻むリズムの上に、下降して行

く感傷的なメロディが出てきます。死の恐怖にも似た憂鬱な空気は最終楽章の雰囲気を暗示させるようなところもあります。

やがて徐々に気を取り直して元通りのワルツに戻りますがやはり5拍子。踊れないもどかしさは変わりません。鐘の音が遠くから響き（管楽器による下降音型のコラール）、舞踏会は終わって皆は三々五々帰り始め、最後は重い和音の上に中間部の主題の断片が演奏されて消え入るように一人寂しくため息だけが残ります。

第3楽章 Allegro molto vivace (快速に、非常に活き活きと)

12／8拍子のスケルツォと4／4拍子の行進曲が交錯する楽章です。全体に暗くメランコリックな雰囲気のある曲全体の中で、この楽章だけは華やかな雰囲気があります。街中の喧騒のような弦楽器の3連符に乗って、主題の断片がオーケストラのあちこちから聞こえてきます。やがて旋律の全容が2本のクラリネットで示され、パワーを増しながらオーケストラ全体に広がり、ついには力強い大行進曲へと発展します。終結部では、打楽器も盛大に加わって、強烈なクライマックスを作ります。

全4楽章の中で唯一、勝利を予感させる輝かしい楽章で、とてもダイナミックに終わりますので、演奏会の時はここで拍手が起こってしまうこともよくあります。

第4楽章 Adagio lamentoso (ゆっくり、悲しみをもって)

全曲中、特に独創的な性格を持つ楽章です。交響曲の第4楽章といえば快活に終わるのが定番ですが、この楽章は、息が絶えてしまうかのように暗く静かに終わります。

楽章の最初から痛切極まりないヴァイオリンの主題が出てきます。この主題は第1ヴァイオリンだけで演奏されているように聞こえますが、実は1stヴァイオリンと2ndヴァイオリンが旋律を1音1音交互に演奏するように書かれています。1つの楽器でメロディを演奏するのと違い、すんなりと行かない喘ぐようなざこちなさを出そうとしたのかもしれません。この主題を繰り返しながら痛切に盛り上がった後、少しテンポの速いアンダンテの中間部に入っていきます。

やがて不整脈のようなホルンのシンコペーションを伴奏に絶望感はいよいよ頂点に達し、ffで表現される冒頭の主題は激しい号泣となります。その後ドラがこの世との別れを告げると、トロンボーン3本とチューバによる重い四重奏になり、演奏している楽器がどんどん減り始め、最後はチェロとコントラバスだけが残し、静かに、重苦しく全曲が締めくくられます。